

歴史探訪

クラブ

其の
201



History Inquiry Club

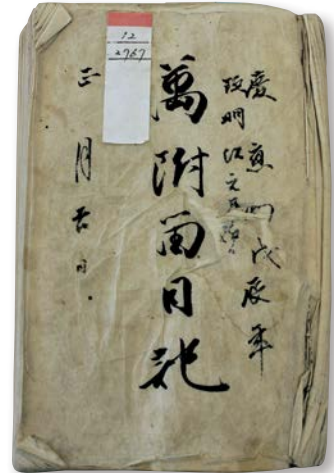
文化財課 ☎22-1720
(博物館) FAX 22-2028

貴重な記録 『畠村萬附留日記』

現在、本市のサブ拠点として、さまざまなまちづくりが進められている「福江」地区ですが、そのまちな名は、130年前に付けられたものです。それまでの福江は、「畠」^{はたけ}と呼ばれ、江戸時代から明治維新期の福江校区には、畠村・向山村・保美村があり、明治22（1889）年の市町村制施行の際に、上記の3村に亀山村を加えて合併をすることとなり、考案された村名が「福江」でし

た。この合併で中心的な役割を担った畠村は、江戸時代には大垣新田藩の支配陣屋が置かれ、合併の頃には、港を中心に商店街が形成されるほどに繁栄しており、当時の人たちが、免々田川の河口に広がる天然の入江を要し、港を中心にこれからも村が栄えていくようにという願いを込めて、入江を意味する「江」に縁起の良い「福」という字が当てられて「福江」という名前になりました。

そんな畠村には、江戸・明治時代に書かれた古文書が多く残され、中でも今回紹介する『畠村萬附留日記』は、大変貴重です。この日記は、タイトルの通り、畠村の日々の出来事が何でも書き留められた村日記のようなものです。江戸中期（享保・元文の頃）から幕末、明治、大正5（1916）年までが確認（145冊）できますが、書いていた人は、不明です。ある年には、畠村に置かれた割元名主という大垣新田藩畠村陣屋が支配していた三河の11カ村（畠・向山・古田・亀山・日出・伊川津村など）をまとめる役目の人が書いて



▲『畠村萬附留日記』慶応4年・明治元(1868)年 渥美郷土資料館蔵

いたことが分かる日記もあるのですが、各年ともこの役目の人が書いていたという記載が無く不明です。この日記には、毎日の天気から、火事や泥棒、祭事、凶事、戊申戦争に敗れた幕府方が逃げてきたという大事件まで、村に起こったさまざまなことが詳しく記されています。

また、畠村では、名主・組頭、重立衆（村の有力者）といった人が村を取り切り、祭りでは若者組が大きな役割を担っていたことも分かります。そして会合後には必ず酒席がありました。しかし、ここで解決できない問題が発生した場合には、小前衆という一般の百姓を交えて何日も解決策を話し合ったようです。そんな『萬附留日記』の慶応3（1867）年2月16日に、次のようなことが書かれています。

「天気能シ彼岸中日：：雨乞 照り続ク麦作ノ疵ヲ村中心配シ雨乞ヲ願ヒ申シ出候ニ付、今日ヨリ 氏神様工朝暮ニ御燈明 祢宜工申シ入レ候并セテ潮音寺工祈禱願ヒ込ミ候：（以下略）」

続く、2月18日には、「今朝沢山ニ潤雨有之、遊日いたし、村役人并セテ五人組氏神工参詣、潮音寺工も礼ニ罷り出デ候：：（以下略）」とあり、16日以前の記載から1月18日以来雨が降っていないため雨乞いをした結果、その2日後に雨が降りお礼をしたということが分かります。当時の水不足は、今よりもかなり深刻であり、この日記の中には、度々雨乞いの記録が出てきます。

現在、この日記は、渥美郷土資料館において翻刻作業が行われています。田原には『田原藩日記』（田原市指定文化財）が、福江には『畠村萬附留日記』があり、どちらも市内に残された貴重な文化財です。※『畠村萬附留日記翻刻記録集・慶応三年「畠村萬附留日記」抄録』を発売しました。一冊1000円で田原市博物館、渥美郷土資料館で販売中です。（学芸員 天野敏規）